

日本の呼吸ケアの トツプランナーをめざして

独立行政法人国立病院機構 南京都病院 (京都府城陽市) 院長 坪井 知正



南京都病院は1939年2月に傷痍軍人京都療養所として設立され、1945年12月に厚生省に移管、国立京都療養所となり、1969年から重症心身障害児病棟120床を設置、1975年4月には国立療養所南京都病院に名称変更しました。2004年4月からは、全国の国立病院や国立療養所が新たに独立行政法人国立病院機構として143施設から成る1つの組織になりました。その1施設である南京都病院の現状を伺いに、昨年4月より院長を務めておられる坪井先生をお訪ねしました。(9月29日取材)

現在、南京都病院ではどのような疾患を主に診ておられるのですか。

南京都病院は、呼吸器センター、脳神経内科、小児科を中心とした病院です。結核はもとより、一般の呼吸器疾患(非結核性抗酸菌症、肺がん、COPD、間質性肺炎、気管支喘息、睡眠時無呼吸症候群、慢性呼吸不全等)、重症心身障害、小児慢性疾患、神経・筋疾患、長寿医療、脳卒中リハビリ並びに一般疾患の診断と治療を中心とした診療機能を持ち、専門性のある高度医療の充実に努めています。2012年に入院病

棟が建ち、2018年に新外来管理治療棟が開棟して、現在は安全で、清潔・快適な医療空間を提供できようになりました。当院で診るのは、急性疾患ではなく、ゆっくりと進行する疾病です(もちろん、受診歴のある患者さんが急性増悪された場合の急性期治療も日常的に行っています)。慢性疾患の診療に関しては、それぞれの科が世界レベルの専門性を目指し、日々努力しています。

医療内容の標準化を図る

当院に求められるものの第一は、地に足がついた実地臨床です。通常の症例から高い専門性が求められる症例まで幅広くカバーし、それぞれの患者さんに最適な医療を提供することを目標としています。それを達成するためには、より高い専門性と治療の標準化が必要となります。どの医師が主治医になっても「南京都スタンダード」の医療を受けられるよう、クリニカルパスと医師カンファランスを充実させ、提供できる医療内容の標準化を目指したいと思っています。同時に、診療科の垣根をこえて、各々が協力しあって、治療に難渋する症例に対応する仕組みを構築していきます。

実際に患者さんの役に立つ臨床研究

第二には、専門性をより科学的に進化させるための医学(臨床)研究だと思っています。医学研究には最先端なものから実際の臨床に根ざした身近なものまでありますが、当院では実際に役立つ世界レベルの臨床研究を展開しています。呼吸器関連では、呼吸抑制の少ない睡眠薬が在宅でマスク人工呼吸(非侵襲的人工呼吸)をしておられる方々に比較的安全に投与できることや新しい装置を用いた呼吸リハビリテーションが極めて有効であること等を証明してきました。

慢性期病院として セーフティネット機能を果たす

当院にはもう一つ、急性期病院では対応が困難な疾患・障害を対象としたセーフティネット機能を果たすという重要な役割があります。重度の知的・身体障害を併せ持つ重度心身障害、パーキンソン病やALSなどの神経難病、重症の慢性呼吸不全、肺結核の方々を対象に、地域の医療機関や保健所、隣接する城陽支援学校と協力しながら、その責務

を果たしていきたいと思っています。

メディカルスタッフの 教育研修に努める

今日の医療現場では、医師だけではなく、看護師をはじめとする各メデイカルスタッフの活躍が必須です。呼吸ケアリハビリテーションカンファランス、緩和ケアラウンド、栄養サポートラウンド(摂食嚥下を含む)、小児呼吸ケアラウンド、神経難病呼吸ケアラウンド等々を、多職種が協力して日々行っています。今後はこれらの活動がより高い専門性を持ち得るようメディカルスタッフの教育研修に努め、また、これらラウンドの成果が関係する病棟看護師や医師に確実に周知されるような仕組みを構築していきたいと考えています。

地域医療構想をはじめとする行政がもつめる医療、地域の医師会をはじめとする地域の医療機関の先生方が必要とされている医療、地域の住民の方々が無くて困っておられる医療など、当院が属する山城北・南医療圏のニーズ目を配り、可能な限り柔軟に対応してまいります。

コロナに関してはどのように対応されましたか。

今の病棟は5階建てで各階が60床の病棟です。1階2階が重度心身障害者の病棟で、3階がALSやパーキンソン病などの神経難病、4階、5階に呼吸器疾患を中心とした患者さんに入っていたいただいています。数年前まで結核病棟は50床で運用していたのですが、患者さんが15人くらいに減少した時点で、5階の西側の20床で結核ユニットとし一般病棟とは分離しました。結核ユニットを陰圧としていたため、残りの40床にコロナ患者さんが入ると、コロナを含んだエアロゾルがユニット内に流れ込むこととなります。京都府と相談して、当院は結核患者さんを専門に診ることにいたしました。結核病棟を有していた他の医療機関(京大病院、京都市立病院、中部医療センターなど)の結核患者さんが当院に紹介され、京都府下の大半の結核患者さんを当院で看ることになりました。現在、結核病棟を増床し28床としています。その結果、当院以外の公的病院はコロナ患者さんの入

院診療が可能となりました。また、当院も患者数が激増した時点で、京都府の要請もあり、解体直前の病棟がコロナ病床に使えるかどうか検討しました。しかし、工期が6カ月、工費が1億7千万円との見積もりを得た時点で具体化を見合わせています。また発熱外来をドライブスルー形式で、唾液でのPCR検査や抗原定量検査を行っています。冬に向けて、屋外でインフルエンザとコロナをチェックするような発熱外来システムを作っているところです。

コロナではいろいろ後遺症が懸念されていますが、呼吸器学会の横山彰仁理事長がコロナ後遺症の調査をすると言われています。半年くらい経つと少しは分かってくるのではないかと思います。変異は弱毒化も強毒化も考えられますので、今後もマスクと手洗いと人混みを避けるという基本は重要です。今のところ日本で感染者が多くないのは国民性に負うという説や、アジアには別のコロナの既感染率が高く交差免疫があったという説もありますね。

ありがとうございました。



◆坪井 知正(つばい ともまさ) プロフィール

- 昭和31年3月生まれ
- 昭和54年 京都大学理学部卒業
- 昭和54年 京都大学理学部大学院修士課程入学(化学専攻)
- 昭和55年 同上 退学
- 昭和56年 京都大学医学部医学科医学進学課程入学
- 昭和58年 同上 修了
- 昭和58年 京都大学医学部医学科専門課程進学
- 昭和62年 同上 卒業
- 平成4年 京都大学大学院 医学研究科博士課程(内科系専攻)入学
- 平成8年 同上博士課程所定の単位修得及び研究指導認定
- 平成8年 同上 退学
- 昭和62年 医師免許証
- 平成11年 京都大学医学博士(内科学専攻)
- 昭和62年 京都大学胸部疾患研究所附属病院 研修医
- 昭和62年 大津赤十字病院 呼吸器内科研修医
- 平成2年 財団法人豊郷病院 呼吸器科
- 平成8年 国立療養所東京病院 呼吸器科
- 平成11年 国立療養所南京都病院 呼吸器科
- 平成20年 京都大学大学院 医学研究科呼吸管理睡眠制御学 准教授
- 平成22年 国立病院機構南京都病院 診療部長
- 平成25年 国立病院機構南京都病院 副院長
- 令和元年 国立病院機構南京都病院 院長